



## 英語多品詞語の多義構造の一記述試案

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮畑, 一範 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00002711">https://doi.org/10.24729/00002711</a>

## 英語多品詞語の多義構造の一記述試案

宮畑 一範

<kazm@lc.osakafu-u.ac.jp>

### 0. はじめに

英語語彙項目の70%以上を占めると言われている多義語 (e.g. McLaughlin, August & Snow(2000)) の語義間のつながりを認知的観点からとらえて記述する試みは、いくつかの辞書において見られる。英英辞典では *Oxford Dictionary of English* (とその米語版である *New Oxford American Dictionary*)<sup>1</sup>, 英和辞典では『プログレッシブ英和辞典[第5版]』<sup>2</sup>を挙げるができる。語義の関連性を認定する理論的な枠組みの相違はさておき<sup>3</sup>, いずれも基本的に品詞ごとに記述をおこなうという辞書としてオーソドックスな方法を採用。つまり, 多義語が多品詞にわたるケースでも, 同じ品詞の多義に関してはそのつながりを記述するが, 異なる品詞間の語義の関連性には(直接は)言及しない(と言うよりも, 現行の記述法では物理的に不可能である)。多義の認知的な関連性から言えば, 品詞の切り替わりにも我々の精神作用が密接に関わっているケースが多いにも拘わらず, である。

<sup>1</sup> 現在, 第3版(2010)。初版(1998)は *New Oxford Dictionary of English* と冠に *New* がついていた。第2版(2003;2005 revised ed.)から, この *New* が外された。おそらくは, 記述の新しい試みへの意気込みと, それを実質標準とした自信の現れと推測される。以下, *ODE* と略記する。米語版は, 初版(2001), 第2版(2005), 第3版(2010)。いずれもタイトルは不変。

<sup>2</sup> 瀬戸賢一・投野由紀夫(編集主幹), 小学館(2012)。多義語に関して「意味の全体像を丸ごと提示する」(まえがき)記述方式を採用。記述の理論的バックボーンは, 後述の『英語多義ネットワーク辞典』に依拠する。以下, *PG5* と略記する。

<sup>3</sup> *ODE* の記述の問題点については, 瀬戸(2007)で言及されているが, 一言で言うならば, 想定されている3つの語義間の関連パターンだと, *figurative extension* (比喩的拡張), *specialized case* (特殊化)に続く第3が *other extension or shift* と雑多な寄せ集めであるところが大きな瑕疵である。瀬戸(2007)が指摘するように, 第3の寄せ集めから「一般化」を切り分け(「特殊化」と合わせて類一種の関係に基づくシネドキの精神作用としておさえ)れば, 残りは隣接関係に基づく多様なメトニミーに収束する。

『英語多義ネットワーク辞典』（瀬戸賢一（編），小学館 2007）は、英語多義語の記述が一貫した認知的枠組みに基づいて可能であることを、主要な1427語に関して実践・検証した成果である。この中では、多義のつながりとまとまりを最大限記述することを目標にし、品詞一体記述という極めてラディカルな手法を採用している。品詞の枠組みを取り払い、意味的に関連する語義はひとまとめに配置するわけである。容易に想像できることだが、異なる品詞におよぶ語義のまとまりは確かに記述できるものの、そのために、辞書としての検索性を犠牲にせざるをえないというジレンマに陥っている。

本稿では、多品詞にわたる英語の多義語をいくつか実例として取り上げて、同一品詞下の語義だけでなく、異なる品詞下の語義との関連性も同時に提示できるような記述法の確立に向けて、ひとつの試案を示したい。

## 1. 記述上の問題点

例えば、3つの辞書の *after* の記述を実際に見比べてみると、それぞれの問題点が一目瞭然である。

まず、*ODE*（【図1】）と *PG5*（【図2】）の記述である<sup>4</sup>。どちらも、基本的には品詞ごとに語義をまとめて記述するスタイルである。これに従えば、当然のことながら、意味的に関連する語義でも品詞が異なれば、遠く離れた場所に置かれることになる。*ODE* の記述では、例えば、時間的な語義（いずれも問題となる出来事などの時間的にあとで [の]、という意味合い）<sup>5</sup>が、筆頭品詞である前置詞の語義1と、

---

<sup>4</sup> いずれも、語義と用例の記述部分のみを選択的に引用し、成句などは割愛してある。

<sup>5</sup> この語義認定とこれが *after* の中心義として適切かどうかは、議論の余地がある。しかしながら、本稿の趣旨とは直接関係しないので、ここでは深入りしない。*PG5* 同様、Tyler and Evans (2003) は、順序の意味を *after* の中心と考える。

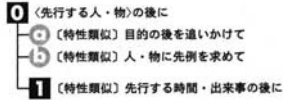
**after** ▶ preposition 1 in the time following (an event or another period of time): *shortly after their marriage they moved to Colorado* | *after a while he returned* | *he'd gone out with his secretary for an after-work drink.* ■ in phrases indicating something happening continuously or repeatedly: *day after day we kept studying.* ■ *N. Am.*: past (used in specifying a time): *I strolled in about ten minutes after two.* ■ during the time following the departure or action of: *she cooks for him and cleans up after him.*  
 2 behind: *she went out, shutting the door after her.* ■ (with reference to looking or speaking) in the direction of someone who is moving further away: *she stared after him.*  
 3 in pursuit or quest of: *chasing after something you can't have.*  
 4 next to and following in order or importance: *in their order of priorities health comes after housing.*  
 5 in allusion to (someone or something with the same or a related name): *they named her Pauline, after Barbara's mother.* ■ in imitation of: *a drawing after Miller's 'The Reapers.'*  
 ▶ conjunction & adverb during the period of time following (an event): *as conjunction* *both time ended in a flood after the taps were left running* [as adv.] *Duke Frederick died soon after.*  
 ▶ adjective [attrib.] 1 archaic later: *he was sorry in after years.*  
 2 nearer the stern of a ship: *the after cabin.*

【図1】 ODE の after の記述

**after** /ˈɑːftər/ 1 順序・序列 …のあとに ①  
 …の後ろを[から]、…の次に(⇔ before): *After you.* どうぞお先に / *after three hours* (過去において)3時間後に / *the first crossroads after the store* その店から最初の交差点 / *We stared after her.* (立ち去る)彼女の後ろ姿を見つめた / *My name comes after yours on the list.* リストではぼくの名前は君の次だ。  
 2 追跡 …を追って ② 追いかけて: *chase after women* 女性を追い回す / *I ran after him.* 私は彼を追った。  
 2a ③ 追求 …を追いかけて ④ …を求めて、探して。(形式) <金・職など>をねらって: *seek after glory* [fame, happiness] 栄光[名声、幸福]を追求する / *He is after a new job.* 彼は新しい職を探している / *She inquired after my brother.* 彼女は私の兄の安否を尋ねた。  
 2b ⑤ 順位 …に先例を求めて ⑥ (特)に英)…にちなんで:(形式) …をまねて、…にならって、…の流儀で; …に従って、…と一致して: *a band named after a tennis player* あるテニス選手の名に因んだ名前のバンド(◆ [米]は for も可) / *a painting after Gogh* ゴッホ流儀(風)の絵 / *He really is a man after my own heart.* 彼こそそこになった人だ。  
 3 ⑦ 時間 …のあとに ⑧ …に続いて、…の次に:(時間的) …過ぎに(英) past): [A after A] 毎 A 毎 A、次々に: <税金など>を差し引いたあとに: *after 10 minutes* 10分後に / *after lunch* 昼食後に / *It's ten after eleven.* 11時10分 / *day after day* 毎日毎日 / *make mistakes one after another* [the other] 次々と間違える / *net income after tax* 税引後の手取り。  
 3a ⑨ 結果 …のあとなので[に]: {しばしば after all A} にもかわらず: *After what I did, I can never face my parents.* こんなことをして親に顔向けできない / *After all our efforts, we failed.* すいぶん努力したがだめだった。  
 — ⑩ 1 ① 順序)あとに、続いて: follow after あとに続く、2 ⑦ 時間)あとで、のちに、その後、翌…: *soon [shortly] after* すぐあとに / *the day after* その翌日 / *They lived happily ever after.* 彼らはその後ずっと幸せに暮らしたとき。  
 — ⑪ ⑫ 限定) 1 (時間的)あと、2 (海・空) 船尾[尾翼]の: 後部の。  
 — ⑬ …したあとに [で] (⇔ before): *I'll go home after I finish this.* これを終えてから帰ろう / *shortly [long] after …* …してすぐ[ずっとあとになっ] / *three days [months] after …* …して3日[月]後に。  
 — ⑭ ⑮ (英略式) デザート: *What's for afters?* デザートは何になりますか。

【図2】 PG5 の after の記述

after prep. (先行する人・物の後に



**ネットワーク** 「(順序・リストなどで)先行する人・物の後に」が中心義。「順序」の概念は、物の空間的な序列だけでなく時間関係を含み、順序が「後」であれば、時間的にも「後」である。「順序」の意味合いが動的に展開すると、「人」を追いかけて/より比喩的な「(目的)を追いかけて」を意味する。より純粋に時間的には「(先行する時間・出来事)の後に」を意味する。

【語史】「もつと離れて」が原義、空間的に用いて「…の後に」の意味となり、さらに時間的に「…の後に」。

0 中心義 (順序・リストなどで)先行する人・物の後に(反意語 before): …の後に[で、を]、…の次の順番に[で]: <人>を追いかけて、<離れていく人>の後ろから、…に向かって — *After you.* (どうぞお先に) / *Emily closed the door after her.* / *Appendices are placed after the List of References.* / *They rank this region immediately after Europe on their list of strategic priorities.* // *I ran after him, bumping against people in my rush.* / *He stared after her with angry fascination.*

1-2 メタ (特性類似 4 0) (目的)の後を追いかけて: <仕事・幸せなどを求めて、<人・もの>を探して、(inquire, ask, look などの動詞とともに) …を求めて(◆目的の達成を目指す) — *chase after women/seek after glory* [fame, happiness] / *Your mother was after you.* / *"She was after my money after all," I hesitated.* / *If you're after a new job, you'll probably have to go through a job interview.* / *She inquired after my older brother.* / *You have to start looking after yourself and your children.*

0-1b メタ (特性類似 4 0) 《とくに英》(人・物)に先例を求めて: …をまねて[に倣って]、(名前) …に因んで — *a band named after a tennis player/ name women after flowers/ The Candleholder is copied after one in the Museum of London.*

1-2 メタ (特性類似 4 0) (先行する時間・出来事)の後に(反意語 before): …の次に、[A after A の形で] 次々に: *adv.* 後で、その後; *conj.* …した後に: *adj.* (時間的)に後の — *after 10 minutes/ soon [shortly, not long] after the war/ day [week, year] after day [week, year]* / *It's ten after eleven.* ((英) past) / *They kept making mistakes one after another.* / *I'm singing and she's trying to repeat after me.* // *adv.* And what came after? / *The patient was discharged the day after.* (◆以上 2 例は自明の目的語を省略して副詞化) // *conj.* Several elderly people are still inside their homes two weeks after the storm passed through. // *adj.* Lewis treasured this conversation in after years.

【図3】『英語多義ネットワーク辞典』の after の記述

接続詞・副詞<sup>6</sup>の語義, 形容詞の語義1に現れる。PG5でも同様に, 「時間」義は前置詞の語義3(系), 副詞の語義2, 形容詞の語義1に見られる。こちらは, ODEに比べると, サインポスト(や丸括弧表示の補足説明)によって, 異なる品詞間の語義同士の関連性を視認可能なように試みているとは言え, 物理的な紙面上での分散感には大差がない。

このように異なる品詞の関連のある語義同士がばらばらに配置されるのを回避するために, 品詞を一体化して記述を試みているのが『英語多義ネットワーク辞典』である(【図3】)。同じく「時間」義の記述部分を見れば(語義1), 前置詞の語義の記述に続いて副詞, 接続詞, 形容詞の語義がそれぞれ並んでいて, ひとまとまりに配置されているのがわかる。確かにまとまり感はあるものの, 記述がごちゃっと埋もれてしまって, 視認性も(辞書として必要な)検索性も低下していると言わざるをえない。

## 2. 改善に向けての記述試案

この2つのデメリットをいずれも解消する方策として, 品詞ごとの記述を縦軸に揃え, 品詞間での語義の対応関係を横軸に据えたマトリックス式の記述を提案したい。縦方向は, 品詞ごとに語義を認知的展開に基づいて配列するので, 同一品詞下での多義構造が確認できる。主たる語義(中心義と主意義)間の展開は太実線で結び, そこから展開する語義(副意義)へのつながりは細実線で表示する。一方, 横方向は, 関連する語義を同レベルに並べ(て細点線で結んで表示する)(対応する語義がない場合は空スペースとする)。これによって, 品詞により語義分布がどう異なるかを見ることができる。また, 異なる品詞の語義間で認知的作用による展開が認定できる場合は, 通常の(同品詞内の主たる語義間の)語義展開に合わせて太く(太点線で)表示す

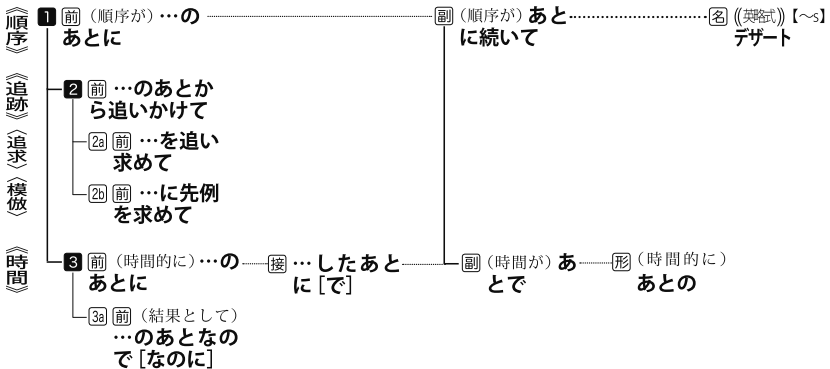
<sup>6</sup> この両者をひとまとめに記述しているのは(他の語の記述でも adverb & adjective のように合体した表記は見られるものの, とくに一貫性はなく), 思想・理論的に意味のまとまりを重視したと言うよりも, スペースの確保(有効利用)という便宜上の理由だと思われる。

る。上で取り上げた after の記述代替案以外にも、いくつかの多品詞語の多義語を実際にこのスタイルに則って記述してみることで、その可能性と問題点を検討する。

## 2.1. after (と before)

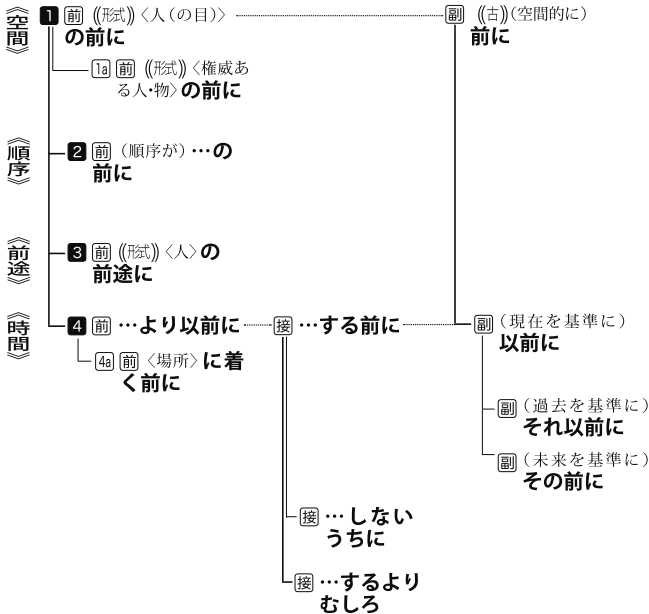
after の語義を、品詞の別を縦、異なる品詞間の意味の関連性を横に取ったマトリックス式で記述すると【図4】のようになる。

前置詞義の認知的な語義展開を軸に、《順序》系の語義は副詞・名詞と対応し、《時間》系の語義は接続詞・副詞・形容詞と対応していること、そして、《追跡》系の語義は、その抽象義である〈追求〉〈模倣〉も含め、前置詞の語義のみにとどまることが記述から一目で見取れる。



【図4】多品詞語 after の記述案

これを踏まえて、「対義」関係にある before も同様に記述すれば（【図5】），両者を見比べることで，after との語義展開・分布の違いも容易に確認できる。また，語義展開の要となる語義が異なり，展開にも相違が見られることから，「対義」が，ごく限定された語義同士において成り立っている点も一見してわかる。



【図5】多品詞語 before の記述案

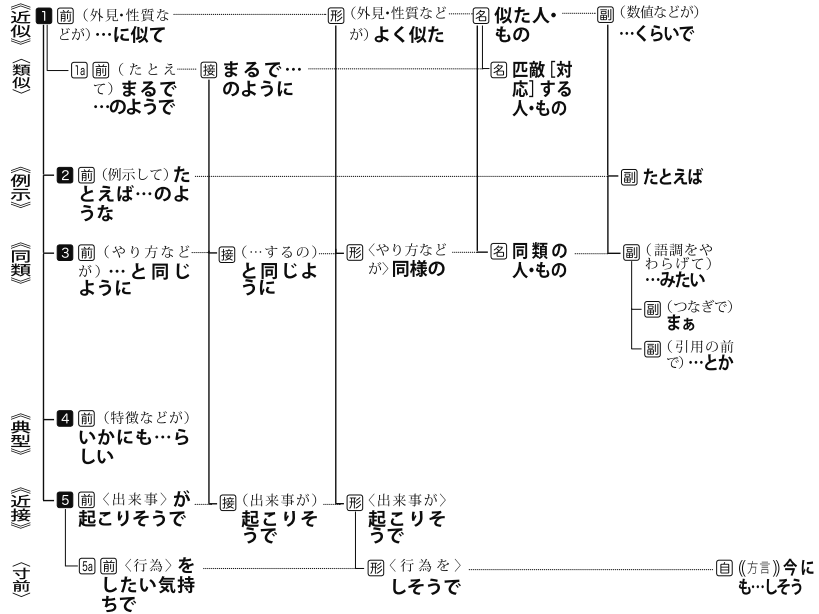
## 2.2. like と round

上で記述案を示した after は5品詞にまたがる多品詞語とは言え<sup>7</sup>, ほぼ前置詞義に多義が集中し, それ以外の品詞の語義数とは大きな隔りがある。とりわけ, 接続詞, 形容詞, 名詞の語義は限られている。このセクションでは, 同程度の多品詞数で, さらにどの品詞も3つ(以上)の語義が認定できるものの中から, like と round を取り上げて記述を試みる。

like は, 前置詞の語義展開を柱に, 接続詞, 形容詞, 名詞, 副詞で多少限定される語義に違いが見られたり, 局所的にその品詞で特有の展開を見せたりするものの, 核となる語義は異なる品詞をまたいで

<sup>7</sup> カバーする品詞数で言えば, 5品詞は最多クラスである。

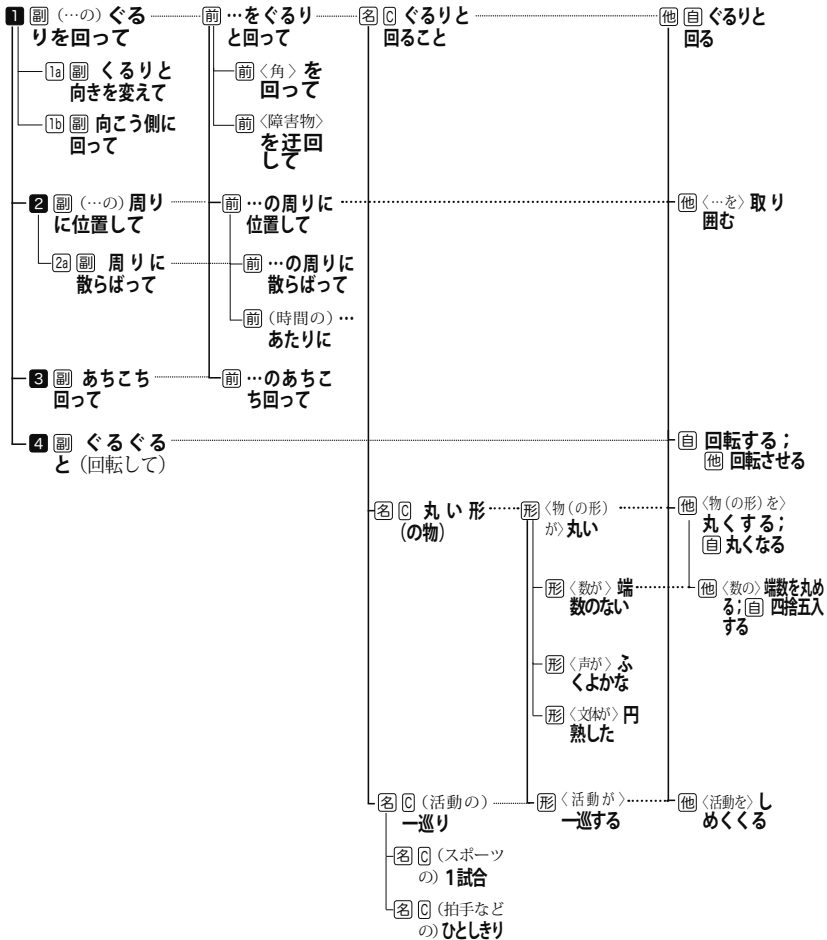
も一定している部分が多い（【図6】）。自動詞義は、方言的でもあり、語義が限定されているので、多品詞に含めないとしても、全部で5品詞におよぶ多品詞多義語である。



【図6】多品詞語 like の記述案

round は（【図7】），副詞義が語義展開の軸で，前置詞義はほぼ副詞義に対応する。名詞義と形容詞義はかなり偏りおよび独自の展開を見せる。ほとんどが他・自の両語義をもつ動詞義は，多少間引かれる対応語義があるものの，副詞・前置詞，名詞，形容詞の語義に対応するものを，かなり広くカバーする。他・自動詞を一括りにカウントして，全5品詞にまたがる多品詞多義語である。





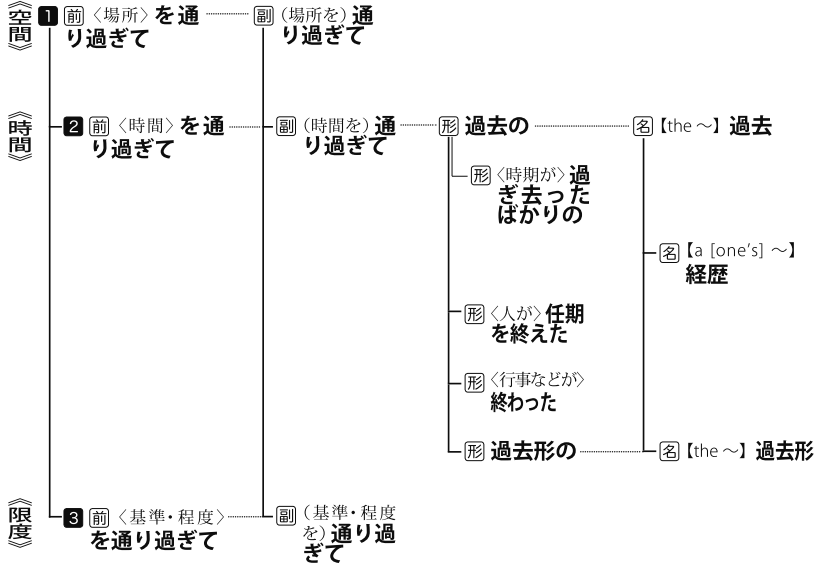
【図7】多品詞語 round の記述案

2.3. past/ close/ as

多品詞の多義語で、品詞数が5つまたはそれを超えるものはごく限られている。大半は2～4品詞である。品詞数が多くなると、特定の品詞で独自の展開を見せることがよく観察される。

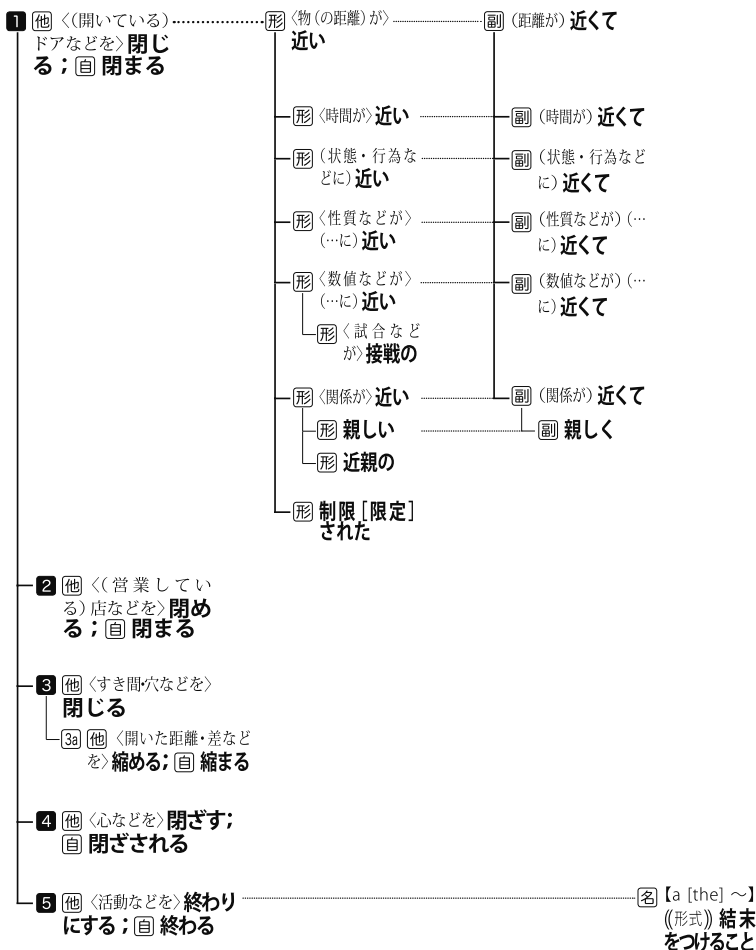
past は、前置詞義の展開 (《空間》→《時間》→《限度》) を柱に、

副詞義は全く同じように展開するが、形容詞義・名詞義では《時間》義に特化して語義が拡張する（【図8】）。語義数では、4つの品詞のいずれも、主意義クラスの語義を3つ(以上)もつ。



【図8】多品詞語 past の記述案

close は、他・自の動詞義の展開が柱となる。とは言え、それ以外の品詞の語義は、動詞義の特定のひとつと関連するのみである（【図9】）。形容詞・副詞の語義は、極めて密な対応関係を保ち、ほぼ並行的に展開するが、動詞義との接点は、中心義であるプロセスに対して結果(状態)にあたる物理的な距離が「近い」という語義だけである。名詞義は、語義自体が限定的で、動詞義 5 と対応関係にある。

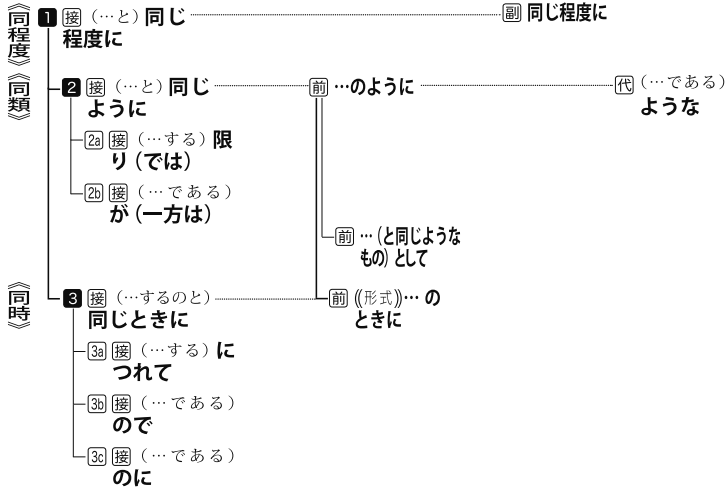


【図9】多品詞語 close の記述案

as は、接続詞が最も豊かに語義展開を見せる (【図10】)。《同程度》を要に、《同類》《同時》に意味が広がる。前置詞義は、このうち《同類》と《同時》の意味合いを引き継ぐ。副詞義は《同程度》のみが対応する。代名詞の語義は《同類》の系統である。

このような偏った展開や対応を見せるものに関しては、マトリック

式の記述によって、多品詞にわたる語義関係の全体像を見渡すことで、展開の指向性や対応関係の違い(の原因)を考察するきっかけを与えてくれる可能性が期待できる。



【図10】 多品詞語 as の記述案

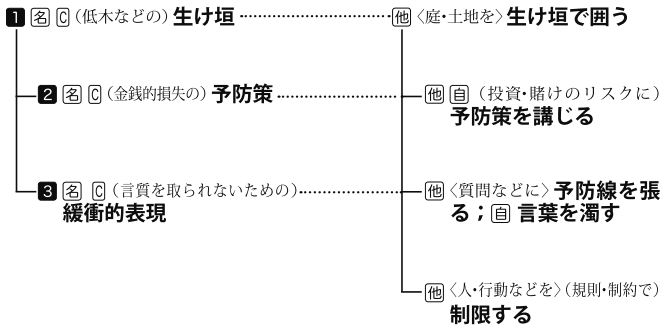
## 2.4. hedge/ smile/ cry

2品詞にまたがる多義語の場合<sup>8</sup>、とくに主たる語義の数がそう多くないものは、多少ローカルな語義展開や品詞間での語義の不对応が

<sup>8</sup> 一般に英語は動詞一名詞の品詞転換が多いと言われるが、1億語超えコーパスBNCで、800回以上の頻度が観察される6318語の品詞(タグづけされたクラス)ごとの見出し語リスト(Kilgariff (1995))に基づけば、その両方がトップ1000に含まれている見出し語は、以下の27語に限られる。look (v 90位; n 637位), use (v 92位; n 283位), work (v 129位; n 146位), need (v 147位; n 280位), show (v 163位; n 845位), place (n 184位; v 620位), point (n 190位; v 795位), end (n 206位; v 647位), state (n 224位; v 902位), set (v 232位; n 744位), help (v 233位; n 873位), change (n 248位; v 351位), form (n 262位; v 555位), face (n 316位; v 599位), control (n 402位; v 766位), force (n 420位; v 809位), increase (v 430位; n 872位), act (n 455位; v 654位), plan (n 475位; v 658位), support (n 493位; v 534位), record (n 524位; v 978位), claim (v 554位; n 889位), deal (v 619位; n 848位), share (n 638位; v 882位), love (v 666位; n 741位), design (n 707位; v 862位), answer (n 810位; v 989位)。

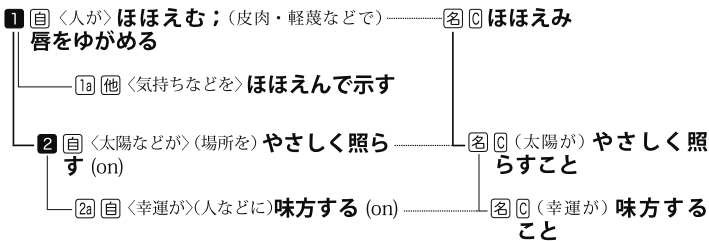
あっても、語義展開の大枠は共通しているというケースが見られる。

hedge は、名詞義と動詞義の展開が、非常にきれいに対応する（【図11】）。動詞義（のうち3つ）は、3つの名詞義をいずれも道具（手段）として用いる、という意味を担っており、それぞれが同じ認知的関連性をもつ。

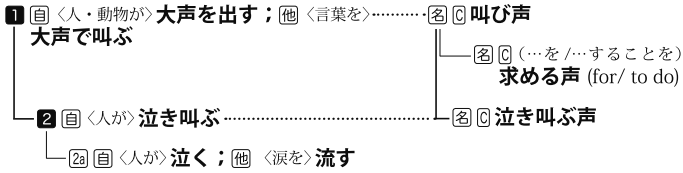


【図11】多品詞語 hedge の記述案

smile は、動詞義の主たる語義2つが（全体的にも4つの語義のうち3つが）そのまま名詞義にスライドする形で対応する（【図12】）。cry も同様に（【図13】），動詞義の主たる語義2つがそのまま名詞義の主たる語義と対応している（こちらは、行為（全体）に対して声（部分）という認知的展開が認定できる）。



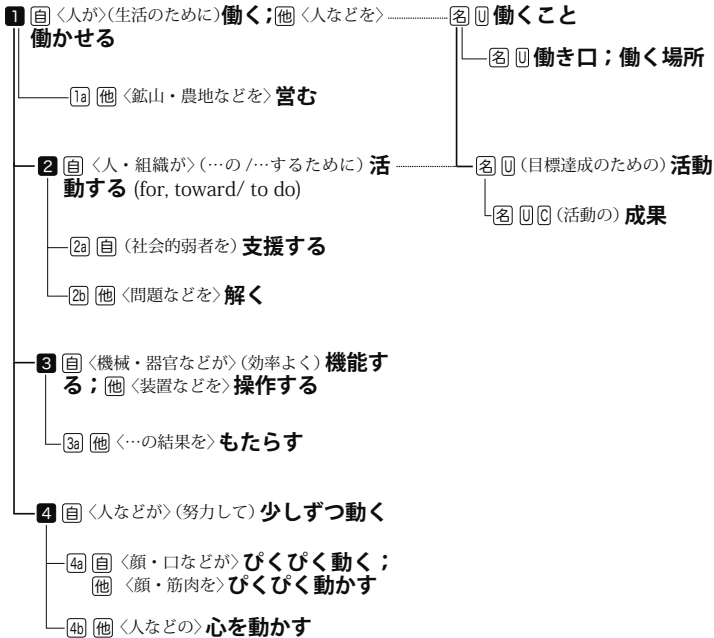
【図12】多品詞語 smile の記述案



【図13】 多品詞語 cry の記述案

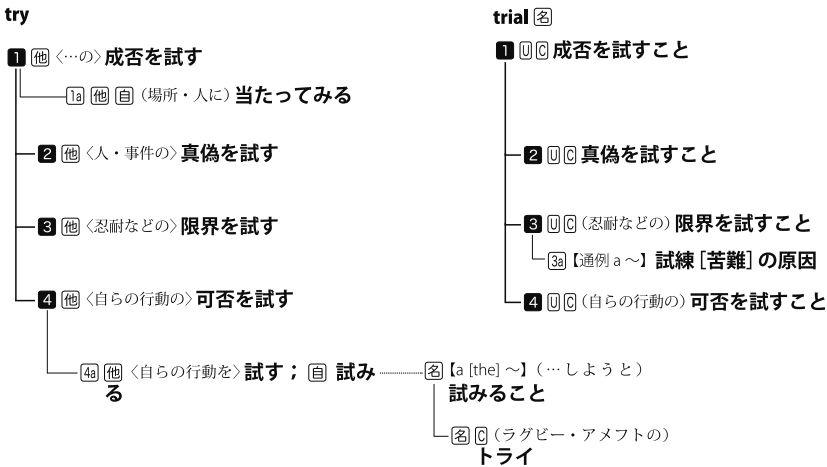
## 2.5. work と try (と trial)

一方で、筆頭品詞の語義は非常に豊かに展開するのに比べて、第2品詞の語義は極めて限定的にしか対応しないケースも多い。例えば、work では、動詞義のうち主たるもの2つしか名詞義には引き継がれない（【図14】）。



【図14】 多品詞語 work の記述案

try はさらに限定的で、動詞義のうちひとつのみが名詞義と対応する。このケースは、語彙的な観点でおもしろく、「〈自らの行動を〉試す」以外の動詞義に対応する名詞義はすべて trial が引き継いでいる。多義構造の記述を並べてみると、動詞 try に対する名詞 try と名詞 trial の相補的な関係が一目瞭然である（【図15】）。



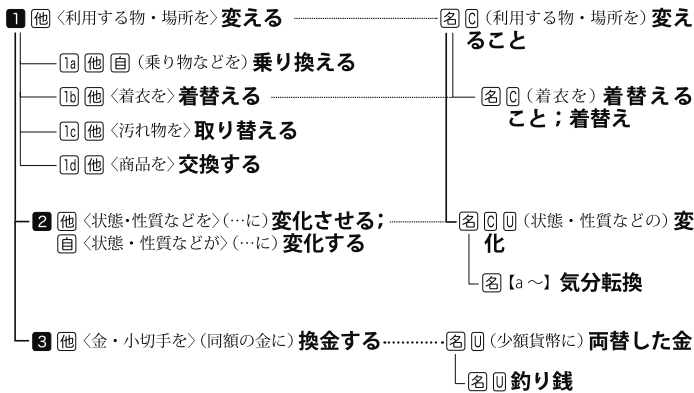
【図15】多品詞語 try の記述案と名詞 trial

## 2.6. change と head

多品詞におよぶ多義語の中には、語義展開が筆頭品詞の語義に強く依存していて、第2品詞(以下)の語義間には(家族的類似性による意味的な類縁感はあるものの)認知的な(直接の)関連性は見られないケースもある。change と head の2例を取り上げる。

change は、動詞と名詞の2品詞からなる多義語である。名詞義の大半は、「変える」に対して「変えること」、「着替える」「着替えること」、「変化させる/する」「変化(させる/すること)」と、品詞間では文法的なステータスが変わるのみで、意味的な展開は見られない。これを品詞内で見れば、いずれも、「変える(こと)」を要として、それ

ぞれ「着替える(こと)」と「変化させる/する(こと)」へと動詞義と同じパタンで認知的に拡張していることになる。ところが、名詞義「両替した金」は、動詞義「換金する」というプロセスに対する結果という関係で認知的に結びつくのであって、名詞義「変えること」から(直接)展開している語義ではない。多義構造を表示するという観点から言えば、このような実態を正確に記述できる必要があり、多品詞のそれぞれの語義関係を縦軸・横軸で記述するマトリックス方式では、その関連性を以下のように適切に提示できる (【図16】)。

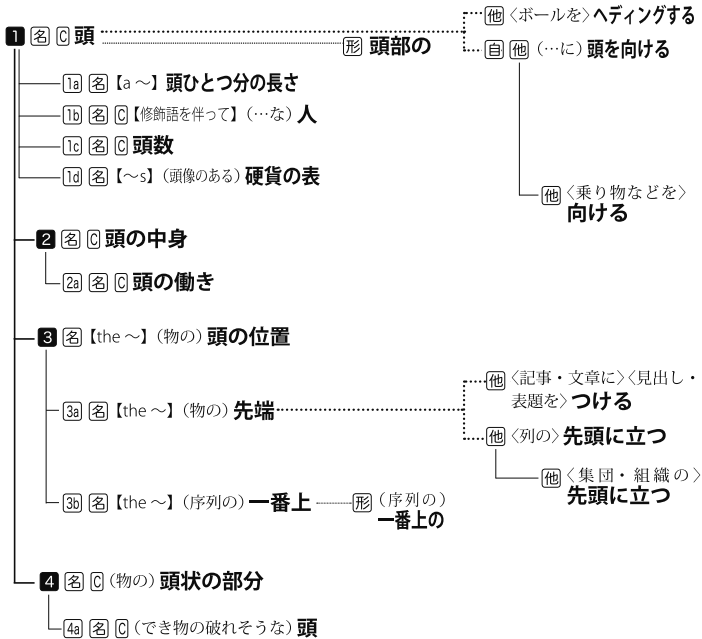


【図16】 多品詞語 change の記述案

head は、名詞・形容詞・動詞の3品詞におよぶ多義語で、change 以上に筆頭品詞の語義との関連が強固である。形容詞義「頭部の」「(序列の)一番上の」は、それぞれ名詞義 ①, ③b と対応する。主要な動詞義はいずれも名詞義と認知的な語義展開の関係にある。「ヘディングする」は「頭」を道具として使ってボールを打つプロセスを表す。「頭を向ける」は「頭」を対象としたプロセスである。「<見出しなどを>つける」は、記事などの「先端」(という場所)に見出しなどを置くプロセスを意味する。「<列の>先頭に立つ」も同様に、列の「先端」(という場所)に立つというプロセスの意味である。いずれの語義も、特



定の名詞義と認知的な関連性を有するものであって、それぞれが互いに(認知的に)関連しているわけではない。この実態は、マトリックス式の記述において正確に示すことが可能である (【図17】)。



【図17】多品詞語 head の記述案

### 3. おわりに

マトリックス式の記述に対する評価は、数多くの実践を踏まえないことには正確に行うことは困難であるが、いくつかの多品詞多義語に関して試作的に記述を行った限りにおいては、多義構造の全体像をかなり正確に記述できる可能性は高いように思われる。ただし、辞書としての記述という観点から言えば、(i) 筆頭品詞以外の語義には語義

番号が振れない<sup>9</sup> 問題をどのようにして回避できるか、(ii) それぞれの語義に対する用例をどのように提示すべきか、という2点は、利便性を考慮しつつ、さらなる創意工夫によって乗り越えたいところである<sup>10</sup>。また、多品詞語がカバーするそれぞれの品詞、あるいは、同じ品詞内での多義が、いずれも同程度の頻度で使用されることはまれで、大抵の場合は偏りが観察される<sup>11</sup>。表示上、高頻度で出現する品詞・語義には何らかのハイライトをつけるという方策<sup>12</sup>は十分考えられるが、その線引きの基準は今後の検討が必要である。いずれにせよ、より多くの多品詞多義語の記述を通して、これらの改善・整備を目指したい。

### 【supplement】

参考までに、本稿で記述試案を示した多義語のBNCにおける品詞(タグ)別頻度ランキングを掲げておく。

<sup>9</sup> 品詞ごとに連番でつけると、異なる品詞間での語義の対応関係が認識しづらくなってしまふ。

<sup>10</sup> 紙媒体にこだわらず、ハイパーテキストとして(のみ)実現を考えるならば、各語義に対して用例をリンクさせる(語義をクリックすることでその用例を表示させる)ことで、(ii)の問題は解消され、(i)も不都合を軽減することが可能である。

<sup>11</sup> Kilgarriff (1995) によるBNC頻出6318語(品詞ごと)の見出し語リストに基づけば、トップ1000の内で複数品詞の同一見出し語がランクに入っているのは86語である。内訳は、3品詞が含まれているto (infinitive marker 7位; prep 10位; adv 739位), as (conj 31位; prep 48位; adv 98位), no (det 74位; intj 128位; adv 368位), other (a 75位; n 264位; pron 685位), right (adv 231位; n 297位; a 299位)の5語、2品詞がin (prep 6位; adv 182位), that (conj 13位; det 27位), on (prep 16位; adv 127位), there (pron 42位; adv 107位), all (det 43位; adv 171位), her (det 45位; pron 93位), up (adv 50位; prep 615位), so (adv 58位; conj 114位), more (adv 68位; det 131位), about (prep 69位; adv 179位)など81語、残り1品詞。この「残り」のうち、多義でないもの(認知的観点から語義分けを行う *ODE*, *PG5* のいずれもが複数語義を認定していない語)は、トップ100では also (adv 81位) 1語のみで、後続もはるか下位に下がって400位以下に therefore (adv 435位), including (prep 443位), sometimes (adv 505位), ago (adv 522位), usually (adv 541位), suddenly (adv 863位), obviously (adv 915位), unless (conj 916位) の8語だけである。

<sup>12</sup> 単に使用頻度の低さを理由に当該語義の記述を省くことは、語義展開の接点を失う事態を引き起こしうる。これでは、ネットワークに欠けが生じ、意味の全体像を提示することが不可能になる。そのため、ネットワークでの位置づけは表示した上で、何らかの形で頻度情報を示す方策を取る必要がある。

after	prep 111位 ; conj 312位
before	prep 185位 ; conj 314位 ; adv 1522位
like	prep 91位 ; adv 2214位 ; a 2329位 ; conj 3775位 ; n 5020位 <sup>13</sup>
round	adv 725位 ; prep 951位 ; a 2116位 ; n 2343位 ; v 4049位
past	n 1120位 ; a 1158位 ; prep 1494位 ; adv 3333位
close	v 664位 ; a 774位 ; adv 1277位
as	conj 31位 ; prep 48位 ; adv 98位
hedge	n 4389位 <sup>14</sup>
smile	v 885位 ; n 1392位
cry	v 1486位 ; n 3244位
work	v 129位 ; n 146位
try	v 174位 ; n 4535位
trial	n 1183位
change	n 248位 ; v 351位
head	n 241位 ; v 1537位 ; a 4138位

### 参考文献

- Kilgarriff, A. 1995. "BNC database and word frequency lists." (1996 updated; 1998 HTML ver.) <http://www.kilgarriff.co.uk/bnc-readme.html>
- McLaughlin, B., D. August & C. Snow. 2000. *Vocabulary knowledge and reading comprehension in English language learners*. (Final Performance Report to OERI, Award No. R306F60077-97) Washington, D.C.: U.S. Department of Education.
- Oxford Dictionary of English* (3rd edition). 2010. Oxford University

<sup>13</sup> ただし、この名詞のランキングには personal likes and dislikes のような「好きなもの」の例も含まれる。ちなみに、like (v) は「好む」の意味で221位。

<sup>14</sup> 本稿執筆時で、名詞タグつきの hedge は1555例に対して、動詞タグつきの hedge は494例しか収録されていない。

Press.

『プログレッシブ英和中辞典〔第5版〕』2012. 小学館.

瀬戸賢一. 2007. 「多義語辞典から新しい英和辞典へ」(日本英語学会  
第25回大会シンポジウム『英和辞典はどこまで意味を記述できる  
か』) Conference Handbook 25, pp. 160-166.

——— (編). 2007. 『英語多義ネットワーク辞典』小学館.

Tyler, A. and V. Evans. 2003. *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge University Press.

(大阪府立大学准教授)